

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520466

研究課題名(和文) 戦国秦漢簡牘文字の多様性と変遷に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study on the Diversity and Transition of Chinese Characters on Wooden and Bamboo Slips, from the Warring States Period to the Qin and Han Periods

研究代表者

福田 哲之 (FUKUDA, TETSUYUKI)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：10208960

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦国から秦漢にかけての漢字の実態と変遷の過程を、当時の竹簡や木簡に書写された筆記文字の分析を通して明らかにしたものである。

戦国期の楚墓から出土した竹簡の書物のうち、楚系文字とは異質の要素をもつ3種の資料を取り上げ、それらの文字の性質について検討を加えた。その結果、時代・地域・用途の3つの要因が、各資料の特異性に深く関与していることが明らかとなった。本研究によって、戦国期における筆記文字の実態に対する理解が深まり、秦の文字統一を経て漢代に展開していく漢字の変遷過程をより明瞭に把握することが可能となった。

研究成果の概要(英文)：This research clarifies the actual conditions and transition process of Chinese characters, from the Warring States period to the Qin and Han periods, through analysis of written characters on bamboo and wooden slips from those time periods.

Among the writings on bamboo slips excavated from tombs from the Warring States period, this study focused on three materials which have different characteristics from Chu-based characters. Through research conducted on their nature, three key elements were found to have a deep connection to the specificities of each material: the era, the region and the usage. This research deepens the understanding of written characters in the Warring States period. Further, the study provides a clearer grasp of the transition process of Chinese characters, developing through the character unification of the Qin period to the Han period.

研究分野：人文学・言語学・中国語学

キーワード：漢字 古文字 戦国文字 簡牘 竹簡

## 1. 研究開始当初の背景

中国においては近年、簡牘（竹簡・木牘）に書写された戦国から秦漢にかけての筆記資料が数多く出土し、古代中国研究に新たな進展をもたらされている。こうした状況を踏まえ、報告者はこれまで、簡牘資料を中心とする漢字史研究に従事し、楚墓出土の楚簡と秦墓出土の秦簡との文字の比較分析を中心に、戦国文字における地域差の実態について研究を継続してきた。研究開始当初までに得られた研究成果のうち、本研究と直接的に関連するものは以下の2点である。

(1) 書籍類に見える文字書写の実態……上海博物館蔵戦国楚竹書の中に存在する同一内容をもつ2種のテキスト群の存在に注目し、両者の間に見える字形および書風の異同について詳細な分析を加えた。その結果、これらのテキスト群は、いずれも一方が他方を書写した直系の系譜関係をもつことを明らかにし、これらは楚国の教学の場における課本または習本であった可能性を指摘した。

(2) 楚簡と秦簡との地域差……漢字の偏旁のうち「水」偏の形体変化に注目し、楚簡および秦簡の用例について分析を加えた。その結果、「水」偏を3本の短い横画であらわすサンズイは、戦国中期以前の秦において独自に成立した俗体であった可能性を指摘した。さらに楚簡に見える多様な「水」偏の形体と秦簡に見える初期サンズイの形体との分析を通して、サンズイの成立過程を解明した。

これらは、それぞれ「戦国簡牘文字の多様性」、「秦の文字統一前後における形体変化」という本研究の展開に結びつくものである。

一方、資料面においても、上海博物館蔵戦国楚竹書や銀雀山漢墓竹簡などの続冊が刊行されると同時に、清華大学蔵戦国竹簡、岳麓書院蔵秦簡、北京大学蔵西漢竹簡などの新資料の整理・公表が進み、さらなる研究の展開が期待される。

## 2. 研究の目的

古代漢字の形体的研究は、従来、比較的保存のよい金文や石刻文が中心的な位置を占めてきた。しかし、金文や石刻文の多くは、祭器や記念碑に用いられた特別な用途の文字であり、とくに形体の変化はまず手写体に萌芽し、その多様な実態も手写体に最も顕著に現れることから、古代漢字の実態と変遷の過程を究明するためには、手写体である簡牘文字への着目が不可欠となる。

本研究は古文字学の観点から、近年資料数が増加して本格的な研究が可能となった簡牘資料を用いて、戦国秦漢における漢字の手写体の実態と変遷の過程を実証的に明らかにするものであり、戦国簡牘文字の地域差に関する研究を多様性という観点から深化させると同時に、戦国から秦漢にかけての古代漢字の変遷の過程を通時的に解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 戦国簡牘文字の多様性……戦国簡牘文字に認められる多様性の背景については、出土地にかかわる地域差の問題に加えて、楚王故事や文書類のような楚の現地性文献であるか、他国の歴史故事や経書のような楚地以外で成立し、楚に流伝したと見なされる他地性文献であるかといったテキストの性格の問題、さらに書写者の学習経験や用字意識など個人差の問題といった複雑な要因を考慮する必要がある。

この点についてとくに注目されるのは、楚墓出土の他地性文献の一部に、楚系文字とは異質の非楚系文字の混在が認められることである。しかも同じ書籍類に属しながら、郭店楚簡（以下、郭店簡と略記）・上海博物館蔵戦国楚竹書（以下、上博簡と略記）が思想書を中心とするのに対して、清華大学蔵戦国竹簡（以下、清華簡と略記）は歴史書を中心とし、両者は種別を異にする。さらに国別の面でも、郭店簡・上博簡には齊系文字との関連が見られたのに対して、清華簡には晋系文字との関連が指摘されている。本研究ではこうした状況を踏まえ、他地性文献に見える文字の特異性に着目し、その要因について分析を加える。

(2) 秦の文字統一前後における形体変化……簡牘を中心とする筆記資料を詳細に分析すると、戦国から秦漢にかけての漢字の史的展開の実態はかなり複雑であったことが知られる。上述したサンズイの分析は、こうした複雑な形体変化の過程を実証的に究明するための試みの一つであり、本研究においても引き続き他の偏旁および特徴的な形体変化を示す文字について、上述したテキストの性格や秦人か楚人かといった書写者の問題を考慮しつつ分析を進めていく。

なお、秦の文字統一において重要な役割を果たしたとされる秦隸の成立過程については、不明な点が多いが、かなり急速に隸変が進行したと推測される秦簡文字に比べて、楚簡文字には全体的に古態性が保持されており、秦隸の成立過程を解明する上でも、楚簡文字との比較分析は一定の有効性をもつと考えられる。また、漢代簡牘については秦文字の継承という観点から、西漢期の資料を中心に取り上げる。

## 4. 研究成果

本研究の主要な成果として、戦国簡牘文字における多様性の要因（時代・用途・地域）の解明が挙げられる。以下、時代の面から浙江大学蔵戦国楚簡『左伝』（以下、浙大簡『左伝』と略記）、用途の面から清華簡『保訓』、地域の面から清華簡『良臣』・『祝辞』を取り上げ、研究成果の概要を記す。

(1) 浙大簡『左伝』の真偽問題……浙大簡『左伝』は『浙江大学蔵戦国楚簡』（浙江大学出版社、2011年）により全容が公表された。その後、邢文氏が浙大簡『左伝』について偽

物説を提起し、『浙江大学蔵戦国楚簡』の編著者である曹錦炎氏との間で論争が展開された。そこで本研究では両氏の論点を整理し、新たに古代字体の観点から以下の2点を指摘した。

第1点は、浙大簡『左伝』の「侯」字・「志」字の用例など個別の文字にかかわる疑点である。「侯」字の用例19例（字跡不鮮明の簡121を除外）のうち、附簡1以外の18例は楚文字と基本的に合致するが、附簡1のような左側を「イ」に書く形体は漢代以降でなければ見いだされず、前340年頃という浙大簡の推定年代とは、どんなに早く見積もっても百数十年以上の開きがある。また「志」字についても5例の用例のうち簡113のみが別体であり、それ以外の4例は、楚文字と基本的に合致するが、簡113のような上部を「士」に書く形体は漢代以降でなければ見いだされず、同様の時代的齟齬が指摘される。

第2点は字体の体系にかかわる疑点である。古代の漢字において「𠄎」と「𠄏」とが同系に属し、それらを構成要素にもつ系列字の体系が存在することは、白川静氏の一連の研究によって明らかにされたところである。「𠄎」を祭祀祝禱の器とする白川氏の解釈についてはなお異説もあるが、少なくとも「𠄎」と「𠄏」とが同系に属し、「𠄎」と「〇」および「𠄏」と「⊖」との間に、形体上の明瞭な区別とそれらを構成要素にもつ系列字の体系が存在する点については、異論のないところである。

このように戦国期以前において明瞭に書き分けられていた

「𠄎」と「⊖」および「𠄎」と「〇」は後に混淆し、やがて両者の書き分けは基本的に消滅する（右図参照）。ここで注目すべきは近年の出土簡牘を中心とする大量の筆記資料の発見により、両者の混淆の過程を具体的に把握することが可能となったことである。その時代的な変化の過程を簡潔に述べれば以下のごとくである。

戦国中期から後期にかけての書写と推定される楚簡では両者は明瞭に区別されており、混淆は認められない。戦国末から統一秦にかけての書写と推定される秦簡においても両者は区別されているが、一部に不明瞭な例が見いだされる。漢代の資料では西漢前期の馬王堆漢墓帛書や銀雀山漢墓竹簡などにおいても両者は基本的に区別されているが、西漢末から東漢初期の書写と推定される武威漢簡『儀礼』では両者はほぼ同形となっている。こうした状況を踏まえれば、「𠄎」と

「〇」および「𠄏」と「⊖」との混淆は秦代に萌芽し、西漢後期から東漢前期にかけて両者の区別は徐々に消滅していったと考えられる。

これを書体史の観点からとらえれば、両者の混淆は漢隸の成立と軌を一にし、戦国期の古文においては書法上からも明瞭であった両者の書き分けが、秦隸にもとづく隸変によって同じ書き方に变化したため、漢隸においては形体上の区別も消滅するに至ったとみることができる。そして、こうした変遷の過程を踏まえれば、両者の書き分けとそれにもとづく系列字の体系の存否をもって、戦国期の文字資料であるか否かの判別基準とすることが可能となる。

そこでこの基準を浙大簡『左伝』に適応すると、「𠄎」の系列字に属する「史」・「事」・「吏」、𠄏」の系列字に属する「會」・「魯」・「皆」、⊖」の系列字に属する「春」・「旬」のいずれにも、明瞭な形体上の齟齬が存在することが明らかとなった。

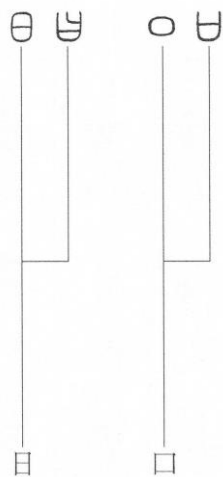
こうした状況は、「𠄎」と「〇」および「𠄏」と「⊖」を区別しない書写習慣をもつ書き手が、古代字体の体系性を理解しないまま、戦国文字を部分的に参照しつつ書写したことを如実に示すものであり、浙大簡『左伝』が偽簡であることを裏付ける明確な証拠と見なされる。

(2) 清華簡『保訓』と三体石経古文との関係……清華簡『保訓』は『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』(中西書局、2010年)に収録された逸書であり、重病を患った周の文王が太子の発(後の武王)にあてた遺言を内容とする。

書法風格の観点から注目されるのは、『保訓』と魏の三体石経の古文との間に緊密な共通性が認められる点である。馮勝君氏は三体石経古文が齊魯地域の文字写本に来源するとの前提から、書法風格と文字形体との両面にわたって分析を加え、『保訓』を「齊魯地域の書法風格の特徴をそなえた楚文字の写本」と位置付けている。






ただし今のところ齊魯地域出土の戦国簡牘は知られておらず、三体石経古文の書法風格が齊魯地域のそれをどの程度反映したものであるかは不明とせざるを得ない。そこであらためて『保訓』を簡牘という被写材料の枠組みでとらえ直してみると、他の大部分の戦国簡牘文字とは異なり、謹直性や画一性・装飾性といった諸点で、青銅器銘文の正体との間に様式上の類似点が少なからず認められる。こうした状況から『保訓』の特異性を理解するためには、用途差への着目が必要であると考えられる。

この点について具体的に「之」字を例に取り上げる。まず金文と簡牘との両者の資料が備わる楚文字についてみると、鑄造された金文には正体、簡牘文には俗体が用いられており、両者の間には明瞭な字体の使い分けが認められる。ただし留意すべきは、金文におい












でも草卒に鑿刻されたものには多く俗体が用いられており、字体は必ずしも被写材料によって既定されるわけではなく、むしろ資料の性質や内容と深くかかわっていることである。この点は『保訓』の字体の特異性を理解する上において重要な示唆を与える。

資料上の制約から十分に把握しがたい部分も残るが、楚文字に認められるこのような対応関係は、地域差を超えて基本的にどの地域にも共通するものであったと見なされる。例えば馮氏の見解との関連から齊金文についてみると、楚金文と同様、鑄造銘には正体が用いられるのに対し、鑿刻されたものには多くの場合、俗体が用いられており、両者には共通の対応関係が認められる（下図参照）。

	金文(正體)	金文(俗體)	簡牘
楚文字	 禽章銅 王孫詰鐘	 歸客壺 禽志鼎	 大卜 包8
齊文字	 陳胎戈 陳純釜	 歷臺1185 銅雁足盤	齊魯地區簡牘 (未發現)

こうした状況を踏まえれば未発見の齊魯地域の簡牘についても、その書法風格は明らかにし得ないとしても、少なくとも形体面では楚簡と同様に俗体が用いられた可能性が高い。そしてこのような用途差にもとづく対応関係を念頭に置いた上で、あらためて三体石經古文および『保訓』の「之」字をみると、俗体とは明らかに相違し、字体類型の大枠としてはむしろ正体との間に多くの共通性をもつことが明らかとなる（下図参照）。

《三體石經》： 石 25 下

《保訓》： 01  03  04  05  06  
 07  07  07

ここで留意されるのは、これまで指摘してきた『保訓』の字体と青銅器銘文の正体との共通性は、あくまでも他の簡牘文字との比較を前提とした特色であって、必ずしも両者の同一性を意味するわけではない、という点である。事実『保訓』の字体と青銅器銘文の正体とを比較すると、両者の間には組織構造および書法風格の両面にわたって相違点が見いだされ、『保訓』には通常の簡牘に用いられる俗体と共通する例も少なくない。ただし同時に『保訓』と三体石經古文との間には、とくに書法風格の面で偶然とは見なしがたい独自の共通性が認められ、『保訓』の字体は決して孤立した存在ではなく、その背後には何らかの共通基盤が存在していたと推測される。これらを総合的に勘案すれば、『保訓』の字体は青銅器銘文の正体とは明らかに一線を画し、簡牘の手写という場において特別な用途に用いられた一種の雅体であったと見なすことができる。そして『保訓』との間に独自の共通性を示す三体石經古文もまた、そうした雅体の系譜に位置付けられる。

『保訓』に特別な雅体が用いられた理由については、内容との関連が考慮される。歴史的信憑性の問題は暫く置くとしても、少なくとも戦国期において『保訓』は周の文王が後の武王である太子の発にあてた遺言と認識され、文字通りの「宝訓」であった。こうした状況を踏まえれば、『保訓』に通行の俗体ではなく特別な雅体が用いられたのはむしろ当然であり、その権威づけという点からも雅体の使用は不可欠であったと考えられる。

(3) 清華簡『良臣』・『祝辞』の文字・書法と書写者との関係……清華簡『良臣』・『祝辞』は、『清華大学蔵戦国竹簡(参)』(中西書局、2012年)に収録された逸書である。

1993年出土の郭店簡によって、楚墓出土の戦国竹書に楚国通行の楚系文字とは異質の非楚系文字が含まれることが明らかとなり、テキストの成立・流伝にかかわる国別問題が注目されるにいたった。その後、新たに上博簡も加えて研究が進められ、他地域で成立し楚に流伝した他地性の戦国竹書には、非楚系文字を具有する例が、少なからず認められることが明らかにされたのである。

ここで確認しておきたいのは、これまで知られてきた郭店簡・上博簡は、すべて楚系の用字習慣をもつ楚人が書写したものと見なされている点である。したがって、そこに認められる非楚系要素は、基本的に書き手の側ではなく、書写者が依拠したテキスト(底本)からの影響とみることができる。

同じ状況は、郭店簡・上博簡のみならず清華簡にも見いだされる。例えば『筮法』には、「夕」・「返」・「祖」などの諸字に晋系文字の特徴がみられることが指摘されているが、同時に「左」字を「口」に従う形体に作る点や「見(見)」と「見(視)」との使い分けなど、多くの点で楚の用字習慣との合致が認められる。また書法風格の面においても、一貫して楚簡に特徴的な円転様式をそなえ、このテキストが楚人の書写にかかり、その中にみえる晋系文字の特色は底本の影響をうけたものであることが知られる。

こうした状況において注目されるのは、清華簡『良臣』に文字・書法の両面で晋系文字との緊密な関連が認められる点である。仮に『良臣』に楚系文字とのかかわりが認められないとすれば、『良臣』は楚の用字習慣をもつ楚人ではなく、晋の用字習慣をもつ非楚人の手になる可能性が生じる。そして同じ可能性は『良臣』と同写・同冊とされる『祝辞』にも想定されよう。この仮説に従えば、『良臣』・『祝辞』に認められる非楚系要素は、基本的にテキストではなく書き手の側に由来することになる。

このように一口に非楚系文字具有テキストと言っても、書写者がどのような用字習慣をもつかによって、そのテキストの言語的性格は大きく異なってくる。『良臣』・『祝辞』は、楚人の書写者を前提として論じられてき

た従来の国別問題に再考をうながす貴重な資料と見なされる。

本研究ではこのような問題意識にもとづき、『良臣』・『祝辞』について文字形体・用字習慣・書法の三方面から分析を加え、両篇の書写者は、晋系の用字習慣をもつ非楚人であり、両篇は文字・書法の両面においてきわめて純度の高い晋系テキストと見なされることを明らかにした。この見解に従えば、『良臣』・『祝辞』はこれまで出土例のなかった晋系の戦国竹書として位置付けられ、今後、両篇を新たな資料に加えることにより、晋系の文字・書法に関する研究の進展が期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ①福田哲之、戦国簡牘文字研究略説、漢字学研究、査読有、第4号、2016年(印刷中)
- ②福田哲之、清華簡『良臣』・『祝辞』の書写者一國別問題再考一、中国研究集刊、査読有、第62号、52—73頁、2016年(印刷中)
- ③福田哲之、清華簡〈厚父〉的時代暨其性質、第二屆先秦兩漢出土文獻與學術新視野國際研討會 會議論文集、173—187頁、2015年
- ④福田哲之、簡帛『老子』諸本の系譜学的考察、中国研究集刊、査読有、第60号、53—72頁、2015年、[中文] 簡帛《老子》諸本の系譜学考察、“簡帛《老子》與道家思想” 國際學術研討會論文集、104—114頁、2013年
- ⑤福田哲之、清華簡《保訓》与三体石經古文一科斗体的淵源一、出土文獻研究、査読有、第13輯、4—61頁、2014年
- ⑥福田哲之、清華大學藏戰國竹簡『保訓』の書法、書法漢学研究、査読有、第15号、1—12頁、2014年
- ⑦福田哲之、「史蓄」小考—『史蓄問於夫子』の史蓄と『漢書』古今人表の史留一、中国研究集刊、査読有、第57号、116—125頁、2013年
- ⑧福田哲之、關於浙江大學藏戰國楚簡《左傳》字体的疑点、第24屆中國文字學國際學術研討會 會議論文集、389—406頁、2013年
- ⑨福田哲之、漢簡『蒼頡篇』研究一分章形態を中心として一、第4回日中學者中国古代史論壇論 中国新出資料学の展開、査読有、176—187頁、2012年
- ⑩福田哲之、浙江大學藏戰國楚簡の真偽問題、中国研究集刊、査読有、第55号、54—79頁、2012年

[学会発表] (計9件)

- ①福田哲之、清華簡〈厚父〉的時代暨其性質、第二屆先秦兩漢出土文獻與學術新視野國際研討會、2015年10月17日—18日、国立台湾大学文学院
- ②福田哲之、戦国簡牘文字の書法様式に關す

る試論、第56回中国出土文獻研究会、2014年12月26日—27日、大阪大学

- ③福田哲之、科斗文字再考—三体石經古文と清華簡『保訓』一、平成25年度中国地区大学書道学会、2013年12月14日、ホテルモナーク鳥取
- ④福田哲之、簡帛《老子》諸本の系譜学考察、簡帛老子与道家思想國際學術研討會、2013年10月25日—26日、北京大学
- ⑤福田哲之、上博(九)『史蓄問於夫子』小考、第52回中国出土文獻研究会、2013年8月27日、上海新協通國際大酒店
- ⑥福田哲之、關於浙江大學藏戰國楚簡《左傳》字体的疑点、第24屆中國文字學國際學術研討會、2013年5月3日—4日、台湾国立中正大学
- ⑦福田哲之、漢簡『蒼頡篇』新資料的初步研究、出土文獻「用字習慣」講座(招待講演)、2012年10月12日、台湾国立清華大学中国文学系
- ⑧福田哲之、浙江大學藏戰國楚簡の真偽問題について、第48回中国出土文獻研究会、2012年7月15日—16日、大阪大学
- ⑨福田哲之、漢簡『蒼頡篇』研究一分章形態を中心として一、第4回日中學者中国古代史論壇「中国新出資料学の展開」、2012年5月25日、日本教育會館(東京都)

[図書] (計2件)

- ①福田哲之著、白雨田訳、台湾・花木蘭文化出版社、戦国秦漢簡牘叢考、全207頁、2013年
- ②福田哲之、中国社会科学院歴史研究所・財団法人東方学会 渡邊義浩編、第4回日中學者中国古代史論壇論文集 中国新出資料学の展開、汲古書院、178—192頁、2013年

[その他]

ホームページ等

<http://www.staffsearch.shimane-u.ac.jp/kenkyu/search/74ab8b34a780d338e28091c16047e5e0/detail?page=research>  
<http://www.shutudo.org/>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田 哲之 (FUKUDA, Tetsuyuki)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：10208960